

令和4年 1月31日	農作物病虫害発生予報 2月	山口県病虫害防除所 山口県農林総合技術センター
---------------	--------------------------------	----------------------------

～目 次～

I	予報の概要	1
II	予報	
	【主要病虫害】	2
	【その他の病虫害】	6
III	参考(予報の見方、気象予報)	7

I 予報の概要

農作物名	病虫害名	予想発生量	現 況	
			平年比	前年比
イチゴ	灰色かび病	平年並	平年並	前年並
	うどんこ病	平年並	平年並	前年並
	アブラムシ類	平年並	平年並	前年並
	ハダニ類	平年並	やや少	少

お問い合わせ先

TEL (083) 927-4006

FAX (083) 927-0214

E-mail a172011@pref.yamaguchi.lg.jp

II 予報

【主要病害虫】

イチゴ

1 灰色かび病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	発病初期

(2) 予報の根拠

ア 1月下旬の巡回調査では、発生ほ場率10.0%(平年13.1%)、発病株率0.4%(平年1.2%)、発病果率0.1%(平年0.2%)で平年並みであった(±)。

イ 気象予報では、2月の気温、降水量、日照時間はいずれもほぼ平年並(±)。

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

ア 하우스内が多湿にならないように、晴天時にはできるだけ換気を行う。

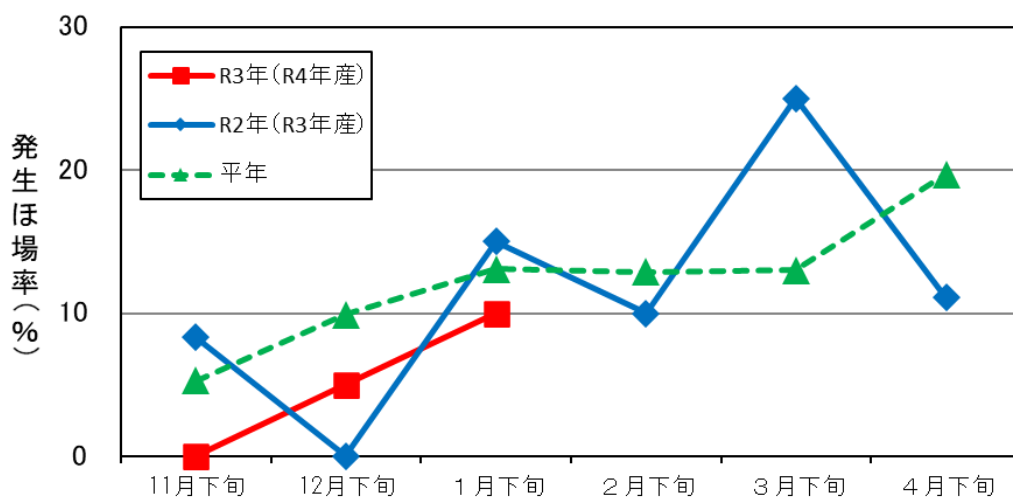
イ 被害果等は伝染源となるので、早期に取り除き、適正に処分する。

ウ 窒素過多による軟弱、過繁茂な生育が発生を助長するため、適正な施肥管理に努める。

<防除のポイント>

ア ポリオキシシン剤、ジカルボキシイミド系薬剤(スミレックス剤、ロブラール剤)、アゾキシストロビン剤(アミスター剤)およびペンチオピラド剤(アフエット剤)は耐性菌が出現しているため、薬剤散布後に防除効果が劣る場合は他の薬剤を使用する。

イ 薬剤耐性を発達させないため、同一系統薬剤の連用は避ける。



イチゴ灰色かび病の発生推移

2 うどんこ病

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	発病前、発病初期

(2) 予報の根拠

ア 1月下旬の巡回調査では、発生ほ場率15.0%(平年14.3%)、発病株率1.1%(平年1.5%)、発病葉率0%(平年0.5%)、発病果率0.2%(平年0.1%)で平年並みであった(±)。

(3) 防除対策

<耕種的防除等>

被害茎葉は伝染源となるので、施設外に持ち出し処分する。

<防除のポイント>

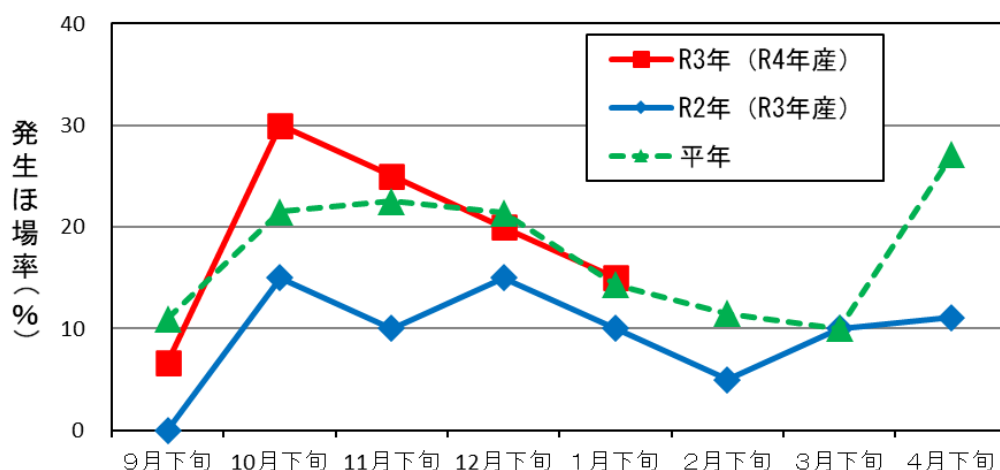
ア 本病は、発病初期には葉裏に発生しやすいため、葉裏をよく確認し、早期発見に努める。

イ 予防防除と発病初期の防除に重点をおき、薬液が葉裏や新芽にも十分かかるよう、古葉を除去して丁寧に散布する。

ウ トリフミン剤などのステロール生合成阻害剤は、耐性菌が出現しているため、防除効果が劣る場合は他の薬剤を使用する。

エ 薬剤散布後は防除効果を確認し、その後も発生が認められる場合は、約7日おきに1回～2回薬剤を散布する。

オ 薬剤耐性の発達を避けるため、同一系統薬剤の連用は避ける。



イチゴうどんこ病の発生推移

3 アブラムシ類

(1) 予報内容

予想発生量	現 況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	平年並	前年並	発生初期

(2) 予報の根拠

ア 下旬の巡回調査では、発生ほ場率20.0%(平年15.6%)、寄生株率1.8%(平年2.3%)で平年並みであった(±)。

イ 気象予報では、2月の気温はほぼ平年並(±)。

(3) 防除対策

<防除のポイント>

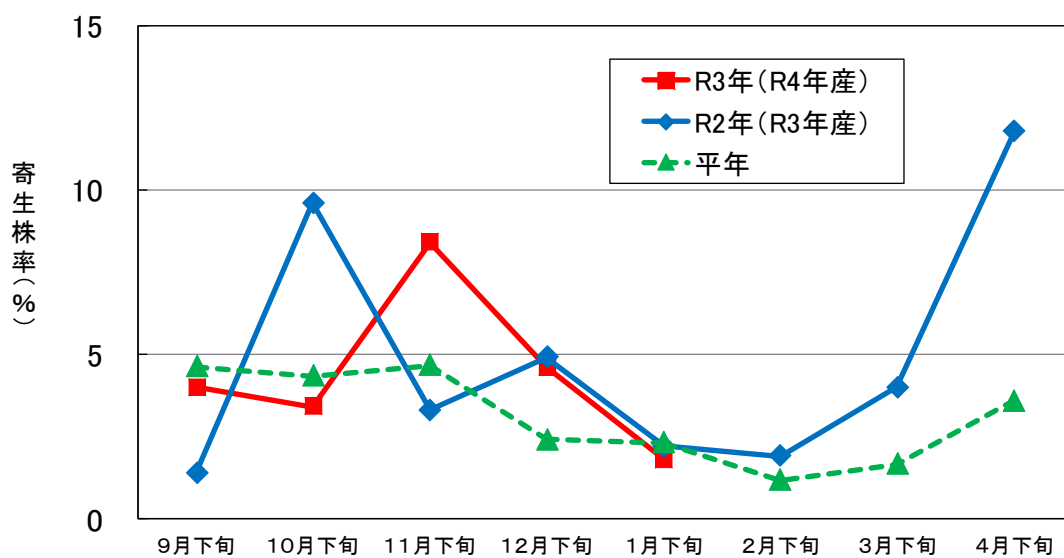
ア 薬剤散布時は、葉裏までムラなくかかるよう十分な量の薬液を散布する。

イ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。

ウ 薬剤散布を行う場合は、ミツバチに影響の少ない薬剤を使用する。

(山口県農作物病虫害・雑草防除指導基準ーミツバチの訪花活動に対する農薬の影響を参照)

(<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cmsdata/3/e/3/3e30ea51da8efd56b606d192ed6b0f26.pdf>)



イチゴ アブラムシ類の発生推移

4 ハダニ類

令和3年10月6日付け令和3年度農作物病害虫発生予察注意報第2号参照

https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cms/a17201/nougyou/shigen/tyuuihou_keihou.html

(1) 予報内容

予想発生量	現況		防除時期
	平年比	前年比	
平年並	やや少	少	発生初期

(2) 予報の根拠

ア 下旬の巡回調査では、発生ほ場率40.0%(平年43.1%)、寄生株率5.8%(平年15.8%)で平年よりやや少なかった(一)。

イ 気象予報では、2月の気温はほぼ平年並(±)。

(3) 防除対策

<防除判断>

ア ハダニ類は体長が0.5mm程度と小さく、優占種であるナミハダニは体色が薄緑色で確認しにくいいため、ルーペを使用して葉裏を確認する必要がある。

イ 摘除した下葉10枚程度を白い紙袋に入れ、室内に1日おくと翌日にはハダニは新鮮な葉を求めて移動し、紙袋の上部に集まるため容易に観察できる。

ウ ハダニ類は部分的に発生することがあるので、ほ場全体をよく観察し、発生を認めたら直ちに防除を行う。

<防除のポイント>

ア 薬剤防除の前には、薬剤が葉裏まで十分かかるように下葉を除去する。また、除去した下葉は、ほ場外に持ち出し適正に処分する。

イ 気門封鎖剤を使用する場合は、その多くがハダニ類の卵には効果が低く、残効性がないため、7~10日間隔で散布する。

ウ 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統の薬剤の連用は避ける。化学農薬に対する抵抗性が発達しているため、散布後に効果を確認し、十分な効果が認められない場合は、気門封鎖剤を中心に防除を行う。

エ 天敵(ミヤコカブリダニ)は次のことに注意して使用する。

(ア) ハダニの発生前、または天敵に影響の少ない薬剤でハダニ類の密度を低下させた後、放飼する。

(イ) 天敵を放飼した後は、天敵に影響の少ない薬剤(マイトコーネ剤、ダニコング剤、スターマイト剤等)を使用する。

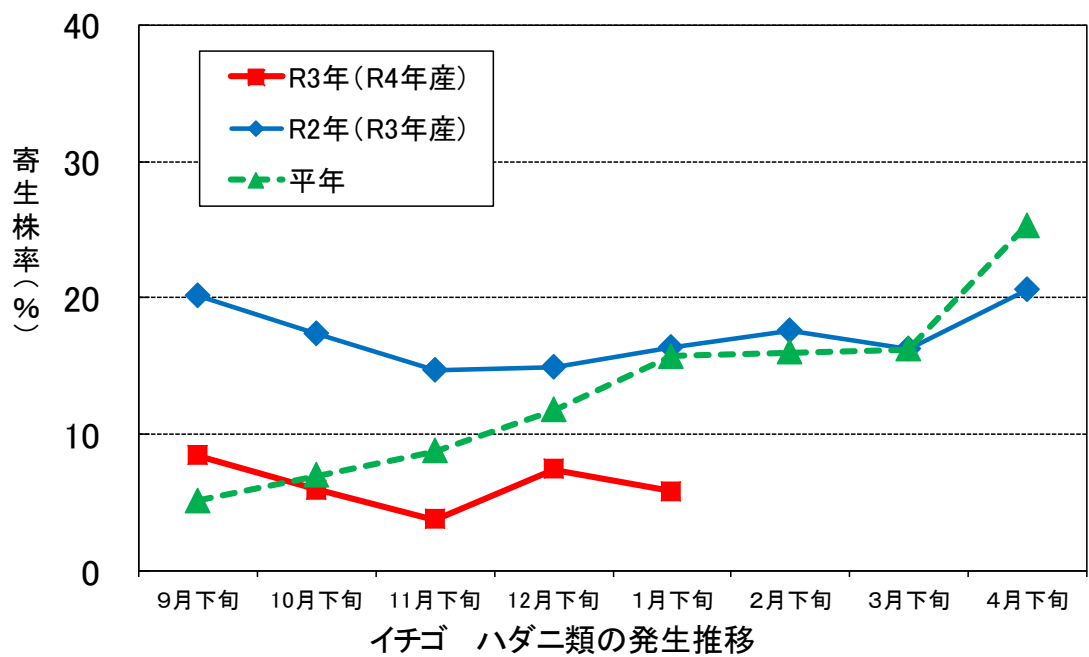
(ウ) 硫黄のくん煙は1日2時間程度とする。

※ 放飼方法、放飼後の管理についてはメーカーホームページを参照

オ 薬剤散布を行う場合は、ミツバチに影響の少ない薬剤を使用する。

(山口県農作物病害虫・雑草防除指導基準—ミツバチの訪花活動に対する農薬の影響を参照)

(<https://www.pref.yamaguchi.lg.jp/cmsdata/3/e/3/3e30ea51da8efd56b606d192ed6b0f26.pdf>)



【その他の病害虫】

作物名	病害虫名	予想発生量	現況		発生ほ場率		備考
			平年比	前年比	本年 (%)	平年 (%)	
イチゴ	アザミウマ類	多	多	多	35.0	6.4	一部で多発ほ場あり
	コナジラミ類	平年並	平年並	前年並	25.0	27.3	

Ⅲ 参考

1 予報の見方

(1) 病虫害発生量の基準（原則として過去10年間の発生量と比較）

ア 平年比

多	過去10年間で最も多かった年と同程度以上の発生
少	〃 で最も少なかった年と同程度以下の発生
やや多	〃 で2～3番目に多かった年と同程度の発生
やや少	〃 で2～3番目に少なかった年と同程度の発生
平年並	〃 で標準的にみられた発生（上記4項目を除くもの）

注：過去の発生量との比較を表わすもので、被害や防除の必要性とは異なる）

イ 前年比

多	平年比の5段階評価で区分し、前年の評価より多い発生
少	〃 前年の評価より少ない発生
前年並	〃 前年の評価と同等の発生（上記2項目を除くもの）

(2) 病虫害発生時期の基準（原則として過去10年間の発生時期と比較）

早 い	過去10年間の平均値より6日以上早い
遅 い	〃 より6日以上遅い
やや早い	〃 より3～5日早い
やや遅い	〃 より3～5日遅い
平年並	〃 を中心として前後2日以内

注：ウンカ類は1971年以降、コブノメイガは1985年以降の初確認日と比較（半旬毎）

(3) 予報根拠における発生要因の評価基準

+	発生を助長する要因
±	発生の助長及び抑制に影響の少ない要因
-	発生を抑制する要因

2 気象予報

(1) 概要

1か月気象予報（1月27日福岡管区気象台発表）

予 報	低 い (%) 少 ない	平年並 (%)	高 い (%) 多 い
気 温	40	30	30
降 水 量	30	40	30
日照時間	30	30	40

週ごとの気温傾向

予 報	低 い (%)	平年並 (%)	高 い (%)
1 週 目	30	50	20
2 週 目	40	40	20
3～4週目	40	30	30